

石巻「モデル都市」を目指したが

写真は朝日新聞1月18日朝刊1面。東日本大震災から10年のいま、石巻から「3・11の現在地」を見つめたい。

太平洋に流れ込む旧北上川の河口部に高さ7メートルの完成間近の堤防が立つ。2011年3月の東日本大震災では、川をさかのぼった津波が岸からあふれ、濁流となって宮城県石巻市の中心部を沈めた。海岸にはいま、56キロにわたって高さ10メートル近い防潮堤が連なる。高台に上らない限り、海は見えない。市を襲った津波は10メートルを超え、住民の40人に1人にあたる4千人近くが犠牲になった。反省から「災害に強いまちづくり」を旗印に復興が進み、景色は10年近くで一変した。市の中心部には、総延長26キロに及ぶ主に避難用の15本の道路と4つの橋が21年度にほぼ完成する。「平時なら30年かかるのに10年で済んだ」と市幹部は言う。

石巻は最大の被災地だった。犠牲は国内全体約2万2千人の2割近くを占める。市内の住宅の半数近い約3万3千棟が全半壊した。国から投じられた復旧・復興予算は被災自治体の中で群を抜き、朝日新聞の集計では、1兆9千億円に上る。その7割超はインフラの整備に充てられた。だが、市の中心部を上空から見ると、目につくのは空き地だ。JR石巻駅周辺を震災前の住宅地図を頼りに記者が歩くと、約3割の258の建物が空き地や駐車場に変わっていた。一帯に8つあった商店街組合は相次いで解散し、1つが残るだけだ。市は、震災の年の11月に公表した復興計画で、「最大の被災都市から世界の復興モデル都市石巻を目指して」と掲げた。現実には、被災者の住まいの再建など喫緊の事業に追われた。市の部長はいま、振り返る。「限られた復興期間では、街の活性化まで手がける余裕はなく、震災からの窮状を乗り越えるのに手いっぱいだった」

都市を襲った阪神・淡路大震災と違い、東日本大震災で被災した土地の多くは過疎地だった。震災前からの人口減や空洞化がむしろ加速した場所は、石巻だけに限らない。巨費を投じて街は頑丈になったが、道路や団地など新たにできた施設の維持コストも重くのしかかる。

石巻市には震災のあと何回か訪ねた。写真は2年半前に撮った日和山、駅前の市役所と市民病院。市役所は閉店した百貨店を再利用したものだ。震災3ヶ月後に訪ねたとき、市役所はごった返していて、魚のにおいなど津波のつめ跡を感じた。海沿いにあった病院は、津波で壊滅的な被害をうけ、2016年9月に規模を縮小して駅前に開院した。浸水を警戒したためか、病院の受付は2階にあった。また訪ねてみたい。



(2021年1月21日)